
緋弾のARIA。の世界で人殺し

不純と神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア。の世界で人殺し

【Nコード】

N9041Z

【作者名】

不純と神

【あらすじ】

これは作者の暇つぶしで始めた作品です。

不定期更新の上に駄文です。主人公は転生者です。

更新スピードは亀です。それでも言い方は読んでください。

プロローグ。という名の設定紹介（前書き）

読もうと思ってくださってありがとうございます。

いきなりわけのわからんことになっていますがご了承ください。

では本文です。

プロローグ。という名の設定紹介

「ぎゃあああ！？なんか学校に言っただけなのに知らない所に立ってる！？」

真つ白な空間で一人の青年が叫んだ。

「うん。やっぱ、これが正常な反応だよ。あの二人が異常過ぎただけだよ」

そんな空間の中で、ロリコンとかが喜びそうな容姿をした子供がいた。

「えっとね。用件は、きみ間違っただけで殺しちゃったから転生させてあげるよ」

「ちよ、俺学校に行こうとしてただけですけど！？」

「では回想に行ってみよう」

まだ、いまいち収集のつかない青年をしり目に回想に突入する少女。

回想

学校に自転車で行く青年。

車が横から来て、ひかれて、田んぼに落ちて、泥がのどに詰まって死んだ。

回想終了

「かつこ悪すぎんだろ！？」

「あゝ。転生先だけども、緋弾のアリアの世界ね」

青年の悲痛な叫びをする――する少女。

「つか、あんた誰！？」

「神だ。で、能力はあげられないけど、技術、設定は君のあのまま生きていたらの可能性までならいいよ」

「か、神様！？え？え？」

ますますパニクル青年。兎に角落ち着くまでほっとく神。

数十分後

「いやー。まさか神様が本当にいたなんて驚きましたよ」

何とか落ち着いた青年は、神様に敬意をもって接していた。

「で、技術はどうする？さっさとしないと転生できなくなるよ？神様会議で最近、転生が認められたんだから」

神は書類上の仕事をしながら適当に受け答えをしていた。

「あの、僕ってあのまま生きてたらどうなったんですか？」

「無差別殺人起こして日本史の教科書に残った」

一応確認する青年。それにさりと答えた神。

「・・・、自分のことながら最悪ですね。決まりました。技術は柴木一姫なみの曲絃系。それから、球磨川の螺子をください。あと、強集科のAランク武偵になれるだけのナイフと拳銃と接近戦の才能。それから、得物もくれますか？」

「うん。あげれるし、君の可能性にぴったしだからまだまだ大丈夫だけど？」

切り替わりの早い青年だなと思いつつ受け答えをする神。

「では、得物全てをかくせるだけの暗器の技術を」

「OK。設定は？」

神は技術と設定は全く別物だと青年に教えた。

「では、……。って言うのはどうですか？」

「えっと、・・・君、頭おかしいんじゃないの？」

青年の要求に啞然とする神。それほどの内容だったのだ。

「よく言われます。できますか？」

「いや、出来るけどさ。え？戯言シリーズの「殺し名七名」に、「呪い名六名」をあっちの世界にもぶち込んで、自分を零崎一賊にする？しかも、彼らもちゃんといさせる？そんな要求する奴、多分君が初めてじゃないかな？」

青年がした要求はとんでもない内容であつた。しかも、自分を零崎にしろだ。ぶっ飛ぶにもほどがある。

緋弾のアリアの世界だから、頭がどうかしている以外には言いようがない。

「それから、キンジ君には双子の姉がいて、二人とも近親相姦の気ありも出来ますか？二人とも零崎の血に目覚めるっつー設定で」

「いやいやいや、出来るできない以前にきみぶっ飛び過ぎだから！」

たしかに、こんな要求する奴は転生者の中でもまれであるうが、彼はあるままだ生きていたら無差別殺人を起こし日本史の教科書に乗る人物なのだ。これくらいぶっ飛んでいても不思議ではない。なわけあるか糞ボケ。

「さらに、勾宮 理澄は人識君と同年にしてください」

「いや、君の可能性上できるんだけどさ。ちなみに理由は？」

「二人を結婚させたい」

頭を抱え始める神。しかし、出来るんだからやるしかない。そう諦めそう言う設定にしといた。

「君の設定道理にしたら、きみは人識君の兄で、キンジ君と同級生原作ブレイクをきみの要求の時点でしているからどうにでもしていよ。それから、アリアに母親の罪の300年位は零崎一賊の者だからね？」

それから、中一のころ零崎の血に目覚めたって言う事にしとくよ。得物はちゃんと用意しとくから心配しないで」

ため息交じりに一定の説明をする神。そして最後に

「あと、転生者って言う記憶は消しとくから。いや、本当に面倒だね。じゃあ、転生先で人殺しを楽しんでいつてらっしゃい」

「ありがとうございます。あなたの事は転生するまで忘れません」
そう言いながら消えていく青年。

ブログ。という名の設定紹介（後書き）

訳がわからなくてすみません。

多分連続投稿になると思います。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

登場人物紹介。だからと言って何も無い（前書き）

連続投稿と言っているのでしょうかこれは？

まあ、根気よく見てくださってありがとうございます。

では本文です。

登場人物紹介。だからと言って何も無い

名前：零崎螺識
ぜろきねしき
むひょうねこ
：無平螺子

年齢：16歳

職業：殺人鬼

副業：高校生

所属：零崎一賊

称号：『人類最低』

身長：聞くな。殺すぞ。(157.7cm)

体重：自称60kg(52.7kg)

武偵ランク：A

髪の色：黒。なのだがよく赤になる。

殺人動機：殺したいから殺す

得物：巨大螺子。ピアノ線(ぼいもの)。ナイフ。拳銃。

零崎の中では唯一殺人動機を持つ殺人鬼。

転生者だが忘れられている。

転生前の運命は無差別殺人を起こして日本史の教科書に乗る予定だった。

武偵校に来た理由はキンジとその双子の姉から、同じ匂いがしたから。

中一のころの柔道の時間中に零崎の血に目覚める。

『人類最低』の称号を持っているが別に弱いわけでもなんでも無い。というかただの自称。

童顔で女子の平均身長、平均体重であることを気にしている。

登場人物紹介。だからと言って何も無い（後書き）

主人公の性格がいまいち解らない作者です。
次回は多分、キンジとかが出ると思います。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

初めての殺人。を傍観する。（前書き）

読んでくださってありがとうございます。
思った以上に筆が進みました。

今回はキンジとその双子の姉が出ます。
駄文ですがよろしく願います。

では本文です。

初めての殺人。を傍観する。

「姉さんこつち！って、ぎゃあああ！？解った！解ったよ！カンナこつち！」

「姉さんじゃなくて名前で呼びなさい！じゃないと大鎌で攻撃するわよ！」

二人の双子の兄弟が裏路地で走っていた。

二人の体には血のあとが残っており、二人とも必死であった。

「はあ、はあ。ここまで来れば大丈夫だろうな」

「そうね。でも、誰か来たみたいだけど？」

二人が裏路地の行き止まりで腰をおろしていると、コツコツという足音が聞こえてきた。

「ん？キンジにカンナじゃないか？どうしたんだ？」

「…、無平？どうしてここに？」

「螺子君？どうしてここに？」

裏路地に来たのは、二人の強襲科での知り合いであった。

二人は彼を苦手としていた。なぜか彼の近くにいと妙な親近感に襲われるだからなのだが、それが気持ち悪くて仕方なかったようだ。

「んー？君達が学校にも来なくて、試験にもでなくなって心配になったからじゃないか？」

それにしてもなんて顔してるんだい？」

二人の質問に丁寧^{ていねい}に答える螺子。そして、別の話題を持ち出した。

「まるで、

お兄さんを侮辱したマスコミの記者を皆殺しにして、なぜか罪悪感が湧かなくて

君達を捕まえに来た警察から逃げるために何人かの警察殺して、それでも罪悪感が湧かなくて

警察を誘導するために一般民間人を数人殺して、でも罪悪感わかなくて

警察がよこした武偵を何人が殺してみて、だけど罪悪感が湧かなくて

そして、ここで警察を袋のねずみにして皆殺しにしようとしているような顔してるぜ？」

「「！？」」

螺子の行ったことは、二人にとっては凶星だった。

彼らは逃げていたわけではない。むしろ殺すために走っていただけだ。

「ん？やっぱ凶星だった？」

そう言いながら臨戦態勢なのか、巨大螺子を取り出す螺子。

それにならない、二人はカンナは大鎌、キンジはベレッタM92F（違法改造済み）を取り出した。

「んー？じゃあ、別段殺したかないけど、零崎の名において殺すわ。零崎螺識つて名乗っとくよ」

そう言いながら突っ込んでいく螺識。

ただしそれは途中で、止まる。理由は良く解らないがとまる。

「んー？さっきからなんだい？まるで殺したくしょうがない衝動を抑えているように見えるけど？」

二人はしゃべらない。まるで何かを押さえつけているかのような顔をしてしゃべらない。

「あははは。ねえ、君達さあ、零崎ッて知ってる？」

二人の表情を見て笑い、零崎の事について聞いた。それでも二人は

何ら受け答えしない。

「知らないか」。まあ、正しくは零崎一賊なんだけどね。

俺もそこにいるから言えるけどさー、君たちまさしくそれなんだよ。

理由なく人を殺す《殺人鬼》ってだけの一賊さ。でも考えてもらんよ。

人を殺すのにいちいち理由を持ち出す必要あるのかな？いちいちだぜ？」

螺識の言葉に信じられないという顔をする二人。

その顔はまるで同じことを考えている奴がほかにいたんだとでも言うような顔であった。

さて、いまさらだがこの二人の殺人を振り返ってみよう。

二人は兄の葬式に出ている時にマスコミ各社に囲まれ

「お兄さんのせいで多くの人が危険な目にあったんですよ」「謝罪の言葉は無いんですか」

このようなことを言われた。そして二人は、ブチッ。と二人の中で何かが斬れた。

気がついたら。いや、ずっと気がついていた。そんな中で二人は人を殺し続けた。

罪悪感などない。あるはずがない。

二人の殺人はどちらかというと宗教によるものだと言っても刺し違えないだろう。崇拜する兄を侮辱した。最初はそれが殺人動機だった。だが途中から、殺すのが目的になってしまった。だから、関係の無い警察を殺した。全く関係の無い民間人を殺した。なぜかきた武偵を殺した。

殺した。殺した。殺した。殺した。殺した。殺した。殺した。殺した。殺した。殺した。

そして今に至る。

「…君達、零崎になる？」

螺識は、巨大螺子を持ちながら二人に行った。

「は？何言ってるんだ？」

「…、ああ、大丈夫大丈夫。零崎になるには血のつながりなんか必要ないから。流血による繋がりがさえあればいいんだ」
困惑する二人にかまわず続ける螺識。

「つーか、君達のその、ヒステリック・サヴァン・シンドロームHSSだっけ？君達はヒステリアって読んでるっばいけど。

もうすでに、変質しちゃって、うーん、そうだなあ。ヒステリア・キルとでも呼んでおこう。

もうすでに殺すためのヒステリアになっちゃってるんだよ」

「…、ねえ。でも無理よ。私達はもうこんなに人を殺しちゃったし。あなた達には迷惑かけれないわ」

螺識の誘いを断るカンナ。キンジもうなずいていた。

「ああ。大丈夫大丈夫。司法取引するから。つっても脅すだけなんだけどね」

「それなら……。いいわ。入るわよ」

「ねえ……。ぎゃあああ！？解った！解った！カンナがそう言うなら俺も入るよ！」

螺識は、あきらめずまだ誘いをかけた。二人はとうとう、入らない理由が無くなったため了承した。

そして路地裏から出る三人。

「君達は囲まれている！おとなしく投降しなさい！」

警察とかが包囲していた。だが次の瞬間

「あははは。まあ、零崎を開始しよう」

螺識の言葉と同時に、隊長らしき人物を除く全ての人の手がもげた。

「なっ!?!」

「ねえ、君は助けてやるから、さっさとどっか行ってくんない? ほら、俺って気まぐれだからさ、5秒以上気が変わらない自信がないんだよ」

驚く隊長らしき人物。それに螺識は後ろを向き、どっか行けと言った。

立ち去ろうとする警察だが、

「あ、ごめん。気が変わった」

螺識の言葉と同時に首がポロリと取れた。それを顔色一つ変えず凝視するキンジとカンナ。

「…、誘って悪いけど君達結構狂ってるね。まあ、だからこそ誘ったんだけど。ああ、そうそう。君達の名前でけどね、キンジ君が零崎次識。カンナちゃんが、零崎薙織でいっかな? まあ、双識のにーちゃんとか喜びそうだよな。別に今の名使ってもいいよ。今言ったのは零崎する時だけでいいんだ」

そう言いながら、警察の方に行く螺識。

「…、あなたは私達に後ろ向けてもいいの? 首刎ねるかもよ?」

「それか、頭を撃たれるか」

自分たちに後ろ姿を向けた事に不信感を露わにした。

「…、家族を疑うだなんてしないよ」

二人に対してニッコリしながら言う螺識。

~~~~~人物紹介。今後は不明~~~~~

名前：零崎次識

：遠山金次

年齢：15歳（この時点では）

職業：殺人鬼

副業：高校生

所属：零崎一賊

称号：『ヒステリア・キル近親相姦』

身長：不明（公式記録が無い）

体重：不明（公式記録が無い）

武偵ランク：E（殺人をしてたから試験を受けなかった）

髪の色：原作を見てみる

殺人動機：無い

得物：武偵時 バタフライナイフ。ベレッタM92F（違法改造済み）

：零崎時 ナイフ全般

零崎史上最も人を殺していない殺人鬼。

姉のカナナとの性的興奮の重度によって通常のヒステリアを制御できている。

また、ヒステリア・キル（螺識命名）は自由に発動できる。

別段人を殺したいわけでもないのに、ヒステリア・キルになるのは稀。

名前：零崎ぜいしき薙織なおり

：遠山かん鉤な

年齢：15歳（この時点では）

職業：殺人鬼

副業：高校生

所属：零崎一賊

称号：『ヒステリア・キル近親相姦』

身長：キンジと同じぐらい

体重：キンジより少し軽い

武偵ランク：E（殺人をしていたから試験を受けられなかった）

髪の色：艶のある黒

殺人動機：無し

得物：兄の金一の大鎌スコルピオをばくった物。

零崎史上最も人を殺していない殺人鬼。

弟のキンジとの性的接触の重度によって通常のヒステリアを制御できる。

また、ヒステリア・キル（螺識命名）は自由に発動できる。

別段人を殺したいわけでもないのに、ヒステリア・キルになるのは稀。

**初めての殺人。を傍観する。（後書き）**

根気強く最後まで読んでくださってありがとうございます。

次話では多分原作に突入すると思います。

また自分が言えた義理ではありませんが、大震災で亡くなられた方々、ご冥福をお祈りします。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

始業式&入学式。でもそのことには触れない。

・  
・  
・  
ピン、  
ポーン  
・  
・  
・

慎ましいチャイム音がある一室に響いたがその部屋は無人であつた。チャイム音の主は星伽白雪。この部屋の主の一人の事が好きな人物であるものだ。

そんな彼女の携帯にあるメールが届く。メールの主は遠山鮑。彼女の恋敵であった。

凄まじい無表情でメールを確認する白雪。

今、部屋の前で突っ立てるんでいるんでしょうけど、私達はとても大事なようがあつてもう学校にいるから。

ちなみに、キンジは私の作ったご飯食ったから。ザマー W W W

グシャ。携帯が潰れる音がした。無論白雪が携帯を握力だけで潰した破壊音だ。

「殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。」

死神もびつくりの形相で殺すを連呼する白雪。殺気を隠すなどどこ吹く風、辺り一帯に撒き散らしていた。直接当てられたわけでもない学生寮の生徒たちの背に悪寒が走ったのは言うまでも無いだろう。

さて、所変わってここは武偵校。ちなみに今日は入学式である。

武偵校には色ものの人物が異様にいるがその中でも異色を放つ二人がいた。

一人は、白く脱色して斑に染めた髪、小柄、片耳に三連ピアス、片

耳に携帯ストラップ、止めと言わんばかりに顔面に刺青、の男子。  
もう一人は、長く艶やかな黒髪に、その髪を上げるようにして付けている眼鏡、尖った八重歯、体とバランスが合っていない異常に長い腕、ここまでは普通だった。そうここまでは。なぜか彼女は囚人が着るような拘束衣を着ていた。

服装違反など、もうどうでもいいぐらいに風紀を乱していたが、誰も何も言わなかった。

・・・というか、こんな色もの二人に誰が積極的に接するだろうか？そもそもこの二人はさつきから口喧嘩を盛大にしていたのだ。

「チッ。なんでこんな学校にこなくちゃいけねーんだよ」

「ぎやははは——、まあ、仕方なくね？あんなことあっちゃ」

「ああ？そもそも、あれはためえが起こした事だろうが！兄貴と次識のにーちゃんと雑識のねーちゃんが、かばってくれたからよかったけどよー！あ、やべ、ためー、そこ動くな。殺して解して並べて揃えて晒してやんよ」

「おお、熱烈なラブコールだ事」

そう言いながら、今にも殺し合いをしそうな二人。そんな二人に近づく、三つの影。

「よー、俊希<sup>としき</sup>。と出夢<sup>いすむ</sup>。よくこの学校に来たな」

「んー。とつしーにいずむん。久しぶり」

「なぜ俺まで？つつか、ホント久しぶりだなー。どうだー？大変だったろ」

上から、キンジ、カンナ、螺子。ついでに彼らが最も遭遇したくなかった人物だ。

キンジとカンナは俊希を気にいつてる。理由は簡単で自分たちの感情の権現みたいな出生だから、である。

螺子はこの二人を結婚させようと躍起になっていた。

そんな三人を見て疾風の如く逃げる二人。しかし、何かにからめた

られた。

「何で逃げるんだ？」

と、邪悪な笑みを浮かべ聞く螺子。

「ふっざけんな！お前、前に俺らに酒飲ませて婚姻届書かせようとしただろうが……！」

「ぎやははは——、条件反射だよ！」

まわりは関わらない事が最善だと言わんばかりに視界にさえ入らないようにしていた。

ついでに言つと、この二人はある事件がきっかけでこの学園に入らざるを得なくなった。

中学は一般の私立校に通っていた、汀目俊希こと、零崎人識。

中学さえ出ているかも怪しい匂宮出夢。

この二人がこの学校に来なければいけない理由など、螺子にとっては、どうでもよくは無いが別段知りたいわけでもなかった。

逆に『ヒステリア・キル近親相姦』の二人は、この二人をあの手この手でどうにかかばいきった。

その際、あまり関わりを持とうとは思わなかった零崎一賊の一人とかわりあいを持ってしまったが、どうでもいつかで済みますのがこの二人だ。

ちなみにこの三人も色ものであった。

螺子は歩くたびにじゃらじゃらというような音がしており、改造制服・・・というか、原型もとどめていない学ランを着ていた。

遠山キンジは・・・見た目は普通なのだが、奇人変人とはかり関わっているため避けられていた。

遠山カンナは、見た目は美少女であるにもかかわらず、なぜか大鎌を隠す隠さない以前に、抜き身の状態でもっていた。

「はあ、この婚姻届に印鑑とサインとかをするだけでいいんだ。両想いのツンデレの『不器用な優しさ』の二人組？」

「やめろ！おい、キンジにーちゃんとカンナねーちゃん！助けてくれ！」

「ぎゃははは——、ザッケンな！」

ぎゃーぎゃー騒ぐ彼らだが、始業式&入学式が近いためぼちぼち自分たちの教室に入っていた。

## 二年A組

「ねえ、このクラスで一番強いのはどいつ？」

二年Aクラスの面々の前でいきなりこう言ったのは、転校生の神崎・H・アリア。

実際には一年時の三学期に来たのだが、馴染めていないでは同じ意味だろう。

彼女になじむ気があるのかは不明だが……。

それはさておき、二年A組の面々はザワザワと騒ぎ始め結果的に

「キンジシスコンとカンナブラコン！」

と、満場一致で言い放った。ちなみに、言われた二人はゴン！と頭を机にぶつけた。

「は？え？でもアイツらって最低ランクのEじゃない」

「それは試験を受けなかったから。いや、凄かったんだぜ？入学試験のときなんか、特に」

「あ、でも変人奇人だってことは保証しとくぜ」

アリアが訳が解んないというような顔をしたが、このクラスの面々アサルトは、特に強襲科の面々は二人を高く評価していた。

「いやいや、パートナー組むならほかの奴にしてくれ！」

「そうよ！……、ほら、無平螺子なんかどう？二年C組だけど、本当の。それこそ武偵の技術じゃない、技術を使われたら、私達なんか俊殺よ本当に」

「……、無平？あの、四年ぐらい前にほぼ全滅したっていう、武

偵の名門、無平家の生き残り？」

クラス全員に推薦された二人は必死に抵抗し、代わりに螺子を推薦した。

この学校での無平の評価は、人によってまちまちだが一括しているのが、男の娘っていう所だったりする。

「ん？そうなのか？（チツ。あいつ家族にまで零崎やってんじゃねーだろうな）」

「初めて知ったわ（おいおい、たしかにあいつは「零崎一賊以外は家族じゃない！」とかいつてたけどマジかよ）」

顔を強張らせながら、あいまいに答えるキンジとカンナ。相手がアメリカ人だったらぶっ飛ばされるかもしれない反応である。

「つーか、何でお前ら螺子とよく一緒にいるんだ？朝も、訳の解んねー二人に話しかけてたしよー」

そう言ったのは武藤剛毅。車輛科<sup>ロシ</sup>の優等生である。モテたいけどモテない残念な人である。

## 二年C組

さて時も時間も変わり、今はクソ長い入学式&始業式が終わり、キンジとカンナが螺子の所にアリアを案内しているのであった。

「うわー、いやだなー」

「どうしたんだ？ねえ・・・、ぎゃあああ！？解った！解った！カンナー！」

「何回言えばいいんだ！」

廊下だろつがどこだろつが、携帯しているナイフでキンジを刺そうとするカンナ。

ちなみにカンナはこんなところでも、大鎌は背中にしょっていてめ

ちやくちや目立つ。

通った人たちは、特に一年生は、振り返っていた。

「ねえ、カンナ？あんなって・・・」

「ん？」

そんな二人の横を歩くアリアがいきなりカンナにあることを聞こうとした。

「『石凧調査室』の何か？」

石凧調査室。殺し名第七位にして、『死神』と恐れられている者たちであった。

その殺しの意味は、生きているべきでない者、運命に背く者を殺すであった。

「・・・、『石凧調査室』？何それ？このデスサイズは、兄ちゃんのをぱくったものだからでどころは良く解らないよ」

とぼけるカンナ。そもそも彼女は殺し名第三位の零崎一賊の者だから知らないはずがないのだ。

「・・・。そう・・・。ならいいんだけど・・・ッ！？」

何かあやふやなものを残して二年C組の扉の前についたが、そこからは尋常ではないほどの殺気で満ち溢れていた。

「あゝ。やっぱ、白雪の馬鹿はまだ怒ってたか。いやだなー。キンジー、私腕組みして一緒に入ろう？そしたら、あいつ絶望で廃人になるかもしれないし」

「カンナ？何やったんだ？」

「あ、あんたら！？何でこんな殺気を目の前にしていながら、どうして世間話してられんのよ！？」

キンジとカンナの二人の会話に驚く、内容では無く口ぶりに驚くアリア。

そして、アリアは意を決して二年C組の扉を開けた。

「鉋殺す鉋殺す鉋殺す鉋殺す鉋殺す鉋殺す鉋殺す鉋殺  
す鉋殺す鉋殺す鉋殺す」

鉋殺す鉋殺す鉋殺す鉋殺す鉋殺す鉋殺す鉋殺す鉋殺す  
 鉋殺す鉋殺す鉋殺す

[illegible]

「おい。せいとかいちよー。キンジが来たぞー」

そのクラスの中には、一人の絵にかいたような大和撫子の女子が殺すを連呼していた。

そして、隣にいる男子の制服を着た女の子みたいな容姿の者が勇敢にも話しかけていた。

「き、キンちゃん!？」

「そう、カンナと一緒に。よー、キンジにカンナー。と誰だそのちびっ子？」

ようやく正氣に戻った大和撫子こと、白雪は扉の方を見るなりまた眼から光を失った。

なにせ、キンジとカンナは腕を組んでいたのだ。ちなみに、この光景を見た二年C組の男子数名から悲痛な声を上げられていた。

ちなみに、螺子は螺子で小さい。

「神崎・H・アリア。螺子、お前のパートナー候補だ」

そんなことお構いなしに、キンジはアリアの説明をした。

「は？何で俺が自分の好みでもない女と組まなきゃいけないんだ？」

「そっぴゃ、お前のこのみって何なんだ？」

的外れな意見でアリアのパートナーを断る螺子。

それに何となく螺子に女の好みを聞くキンジ。

「えっと、銀髪でサファイア色の眼で氷バキバキに出せて……」

「はい。ストップ。そんな人類はそういねえ」

とんでもない女の趣味を言い出した螺子を止めるカンナ。

「ねえ、あんたの武偵じゃない技術って何？」

と、今まで黙っていたアリアがいきなりしゃべりだした。

「ん？えーと、曲絃系だけど？」

「…、曲絃師。私が把握している奴らは全員、大犯罪者。

しかも、その特異性のせいで武偵でさえ黙認をせざるをえないような連中だったはずだけど？」

アリアは警戒の目つきで螺子を見た。なにせ、その曲絃師の内の一人の特徴と螺子の特徴が一致していたためである。

「…、放課後でいい？こんな教室で話すことじゃないし。キンジ、カンナも来い」

「いいわ。聴きたいことがたくさんあるしね」

そして、ピリピリした雰囲気の中、別れていく二人。

## 放課後

「さて、ご察しの通り俺は零崎一賊の者だ。そしてこの二人もな」  
ここは人通りが全くとっていいほどになく、また人が着にくい場所でもあった。

「…、殺し名三位の殺人鬼ね。ママの懲役の約三百年分は、お前たちの罪なんだけど・・・」

少し、考えながら言うアリア。誰だってここで家族を仇なすものとされたくはないだろう。

「武偵法第11条。殺し名七名、呪い名六名の各々に対する犯罪についてでは黙認する。に矛盾しているんだろ？俺らは無差別に人を殺す。それが黙認されているんだ。

なのにお前の母親になすりつける理由がない」

武偵法の中で最も狂った第11条。もともと、このような武偵法は無かったのだが、ある事件を境につくられた武偵法だ。

「そう…、しかもあんたら、零崎一賊はそんなもん考えずに人を殺す。」

ああ、でも『マインドレンデル自殺志願』は人間を失格とかいってたわね」

「ん？レンにあった事あるの？」

思い出すように喋るアリア。そして、零崎一賊の一人をあげた。

「なんか、不合格ってされて殺されかけたわ」

「…、よく生きてるな。不合格〃惨殺なんだけど普通は…」

アリアの言葉に啞然とする三人。それはともかく話を進める彼ら

「…、あんたらもう一回頼むわ。私のパートナーになって。お願い」

アリアは今度は頭を下げ頼んだ。それに三人は少し考え

「一回だけなら…な？」

「そうね。私とキンジは期間限定ならいいわ」

カンナとキンジはアリアの頼みに少し考え承諾した。

一方螺子は

「あいつを捕まえるまでならいいぞ。それまでならパートナーもいないしな」

と、意味深そうなことを言いながら承諾した。

「そう、ありがとう。…。まさか零崎一賊と共闘するなんてね。でも、とても心ずよいわ」

「ははは、殺人鬼を仲間にして心ずよいか…、人識じゃないけど傑作だぜ」

そう言いながら別れる四人。

~~~~~人物紹介~~~~~

名前：神崎・H・アリア

年齢：16歳

職業：高校生

副業：武偵

所属：無し

称号：『カトラ双剣双銃のエリア』

身長：142cm

体重：不明

武偵ランク：S

髪の色：緋色

得物：二丁拳銃と小太刀二刀流

優秀な武偵。99回連続で凶悪犯罪者を捕まえている。
体術には、バリリ・トワードを使っている。

双識の人間試験で不合格が言い渡されているが生き残った数少ない
人物の一人。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9041z/>

緋弾のアリア。の世界で人殺し

2012年1月8日09時46分発行